

逝つた丹羽七郎氏を思ふ

田 中 好

○
世の常套語ではあるが人生如朝露、とは瀟焉として逝つた前内務次官丹羽七郎氏の生涯を思つて更に其の至言感に打たれるのである、氏が學窓を巢立つて其の一生を内務行政に捧げ、氏の人格と其の功績とに依つて内務次官の地位を捷ち得ながら、在官僅に一年にして他界されたことは餘りにもあじきなき人生であつた、氏の多年に亘る體驗からして割出された内務行政改革の抱負は、時に之を聞かされたこともあつたが、之を實現し得なかつたことは本人も定めて残念であつたであらう、氏の長逝は我が内務行政の爲にも亦甚大な損失と言はねばならぬ、氏の悲報に接したとき、彼に籍すに尙四、五年の壽を以てしたならば、とは何

人もが自然に發した悔言葉であつた、四月に鎌倉の病床を訪ねたとき、病情漸次快方に向ひ之から養生すれば大丈夫だ、と聞かされ安堵したのであつたが、矢張り面會だけは避けて居ることであつたが爲に一分の不安を感じつゝ、歸京したのであつたが、今からすれば強て面會しなかつた不幸を嘆ぜずには居られない、四谷の邸に鎌倉からの遺靈を迎へたとき、何とも言ひ得ない感に打たれて長逝した氏を偲ぶのである。

○
氏は負けぬ氣の持主であつた、夫れと言ふのも矢張り彼が會津藩士の息子として育つた爲であらう、嚴父五郎氏は明治の初年例の廢藩の爲に多くの士族が職を失つたので、

之を救済するが爲に夫等を引率して北海道の開拓に従事し、今も殘されてゐる丹羽村を建設した人である、夫れで原籍は北海道にあるのであるが、氏の性格を表はすところの血源は矢張り會津に在るのであつて、有名なあの若松城外飯盛山の露と消えた白虎隊の意氣と精神とは、氏も亦之を繼承してゐる、夫れは嚴父五郎氏が子供の教育に峻嚴であつて、身は北海道に在りながら幼き子供を會津の親戚に託して士族的な教育を施された勢にも依るのである、寡言であつて氣骨稜々たる威容と悠々迫らない態度とは東北の野武士を聯想せしめ、氏に對して弱音を吐くことは禁物であつた、今の若い連中が良く、頑張れ、と言ふが氏は其の呼主格の人であつた、併し此性が氏に幸を齎したこともあらうが、又一面氏を禍せしめた種とも爲つてゐる、這般後藤内相の手で行はれた地方長官の異動に方つても、之を上手に片附けるか否かは後藤内相のバロメーターと爲るのであつた、で當時風邪の爲に病床に在つた氏は、其の性格の命ずるが儘に行動し醫師の勸告をも斥けて出勤し更迭問

題に没頭した、甲地から乙地に轉任せしむる程度の更迭なら見合すに加くはない、更迭の目的が人心を一新するに在る以上は適材を適所に配置しなければならぬ、之が爲に老朽乃至は無能を淘汰する亦已むを得ないとは、彼の主張であつたそうだ、併し後藤内相は周圍の事情を考慮して政治的に決定せむとするので、之が評定に翌朝午前六時までもかゝつた、其の爲で病情は頓に増進したとさる言はれてゐる、葬儀の日、某が新官僚二人の俊才を倒した、と言つて丹羽氏と藤井前藏相のことを悲しむだが、氏の今日を見るに至つたのも或は頑張つたことが禍と爲つたのでは無からうか。

○

氏は京都大學時代は亂暴者だと言はれる位に元氣旺盛であつて、多くの逸話を京洛の地に殘してゐるが、港灣課長時代に病を得、夫れからは餘り達者では無かつた、一度内務書記官を休職となり、明治神宮造營局書記官に復職した後は體の健康に注意するやうに爲つた、併し夫れでも尙無

理をすることがあつた、各地に出張しても若い連中が造つた無理な行程を其の筋書き通りに旅して草臥れたとは言はない、今日は少し元氣が無いぢや無いかと言へば、昨日から中耳炎をやつてゐる爲だと言つて平氣で出勤執務してゐる、夫れは大變だと注意するとヂヤ退廳後歸りがけに醫者に寄つてみやう、と言つた調子で餘り氣にしない、病氣は氣のものだから餘り心配しない方が可いとは、病弱の氏かおよく聞かされたものだつた、此調子で無理されたことが今回の不幸にも手傳つてゐるやうである。

氏は見習時代を東京府で送つたが、大正七年警保局事務官と爲つて。昭和四年岩手縣知事に轉するまで、官吏生活の大半を内務省で過した、内務系官吏の多くの人々が所謂淨草稼業として地方を轉々するのに、氏は岩手埼玉の兩縣知事を一年九箇月勤めたゞけで又本省に戻つた、官吏としては幸運に恵まれてゐる、併し夫れは氏の手腕力量よりして當然に得られた結果である、固より内務系の官吏として

地方民に直接し善政を布くのも、一つの快味を感じるものであつて、縣民の忘ることの出来ない良二千石と爲るのも亦本懐であらう、併しながら本省にあつて夫等地方長官を指導する役目も亦男兒の本懐である、夫れを氏が恣にしたのは氏が博學であるのに加へて研究心の旺盛であつたことが主因を爲して居る、東大の農科で農業政策を研究した氏は、其の實行を按ずるに當つて到底農科を以て満足することが出来ない、更に京大の政治學科に學んで農業政策の實現を所期した如きは氏の性格と研究心の盛なことを物語るのである、斯くて地方政治に興味を有するに至つた氏は、固有の牙えた頭を以て内務行政に關する指導方針を確立することが本省に居る自己の責任であると言ふ自覺を持したらしい。

氏の内務省道路課長時代であつたが、自動車が発達するのに道路が悪い、そこで自動車専用道路の必要が論ぜられ之に關する對策を決定することゝ爲つた、氏は歐洲に於ける制度を研究して専用道路の性質を究め、我國に於ける普

通道路の將來に稽へ専用道路に關する一定の方針を樹立した、其の後數年を経て制定された自動車交通事業法にも張り氏の樹立した専用道路對策が加味されてゐる位に夫れは學理的のものであつた、ところが夫れに合致しない或る種の出願が來た、また自動車専用道路創始當初のことであるから、假令方針と違つてゐても試に之を許さむとする説と、方針に反する以上は假令地方が熱望しても許すべき筋合でないと言ふ説とが對立した、氏が後説の支持者であることは勿論であるが、時の局長以上の幹部は、前説を採つて讓らない、そこで氏も亦自説の再檢討をやつたが研究すればする程自説の正當なことが判つて益々自説を力説して已まない、當時の宮崎土木局長も之には随分弱らせられたが、遂に氏の出張不在中に之を許可してしまつた、當時

氏は筆者を呼び寄せて言ふやう、本省に職を奉ずる役人は、何事に就ても常に指導的な見地にあつて研究し時の勢力や俗論に超越して一定の政策を樹立することが重要な役目であつて、型のきまつた案文に判を押すのが能ではない、と

本省在勤役人の心得を教へられたが、氏は常に此心掛けを以て終始したのであるから、本省向き役人として歴代の内閣が氏に各種の職務を與へた所以である。

本省在勤時代の功績を茲に吹聴するの必要はないが、大正七年土木局河港課長と爲つて以來、一時病氣の爲に休職に爲つたが、岩手縣知事に爲るまで土木局の各課長と爲つて土木行政に盡され一番長く土木局に居た、土木行政の改革を目論んだ有名な堀田貢氏は氏の手腕を信頼して各種の方面に手を伸ばした、今も尙制定されないが港灣法を制定しやうとしたのも此時である、氏は獨自の見地に於て港灣法案を起草し、今も夫れが有力なる丹羽案として尊重されてゐる、萎微振はなかつた道路の改良に關しても、例の産業道路政策を提唱して遂に時の内閣の一大政策に掲げしむるに至らしめた、不幸にして其の計畫は内閣更迭の爲に實現しなかつたが、其の後組織された政友會内閣が其の思想に基いて産業道路政策を實現した如きは、何れも氏に負ふところである。

例の大正の大震災火災のときは、帝都復興院書記官を兼任し地震内閣に於ける後藤新平總裁の下に帝都復興法として特別都市計畫法及其の附屬法令の制定に盡された、當時は帝都の空には黒煙騰々として立ち上り市民は不安の念に襲はれ、誰一人として常務に服する者がなかつたときであつたが、氏は例の村井別邸に設けられた復興院の本部に立籠つて晝夜の別なく復興政策の樹立に盡された、當時友人は氏の健康を按じて進言するであつたが、夫れを聞き容れず新平總裁の意見を改訂しつゝ文字通り献身的の努力を拂つたのであつた、復興事業が些の遅延を見ずして進行したのは氏の手で仕上げられた立法が完きを得てゐた勢であつて、都民は氏の隠れた此努力に對して感謝せねばなるまい。

○

住み慣れた帝都を後にウム行つて來ると云つて岩手縣知事に出たのは昭和四年の七月であつた、居ること一年一箇月、翌五年の八月には埼玉縣知事として轉じたが、又其の翌年四月には土木局長として本省に戻つた、岩手縣の在

任も短かつたが、當時東北地方を襲つてゐた銀行破綻問題を手際よく解決して縣民を安堵せしめたことや、前長官のやり残した遊廓移轉問題を解決したことなどは著大な仕事として今も尙地方で賞えられてゐる、埼玉縣の在任は八箇月であつたが、當時農業縣である埼玉縣では收購や産米の價格暴落して深刻な不景氣に見舞はれ縣民の疲弊困憊は其の極に達し、縣民は縣財政の根本的樹て直しと縣民負擔の軽減を絶叫して已まない状態であつた、氏は是等の聲に聞き昭和六年度豫算を編制したのである、氏は當時筆者に語つて言ふやう、從來の懸案を農村救済對策の手段を以て解決しやうと決心してやつて見たが案外無難に解決し得たと言つて居たが、師範學校本館燒失の復舊、農事試験本場及埼玉學園の移轉新築、市ノ川改修、入間郡北部第二用水の改良やら會の川用排水改良事業など多くの仕事を計畫し實施した。

政府は今頃に爲つて地方長官に地方民情の視察を強要してゐるが、氏は夙に夫れを心得てゐて、新任すれば直ぐ管

下各地に出張して地方の實情と其の要求とを聞くのであつた、そして其の觀察は實に鋭かつた、即ち其の場で直ちに對策を決論した、歸廳後色々事情を以て其の決論の變更

を陳情しても一度決心したことは容易に變更しない、夫ればかりでは無い逆に其の陳情を反駁するのであつた、從つて氏を評するに堅くるし屋と言ふ人もあるが、併し自己の認識判斷に一つの誤を氣付いたときは普通の地方長官にあり勝ちな體面問題などを打捨て、改論することを惜まなかつた、此調子だから前任者の計畫したことも苟も夫れが縣民の利益と爲るものであれば、自己の計畫したものと同じやうに否な夫れ以上に熱心に繼承執行するあたりは、普通の長官の多くに見ることの出來得ない點であつた。

地方長官としての氏は常に積極的考案を持してゐたやうである、夫れを財政方面に就て見ても、縣民負擔の輕減を策する爲に減税に力を入れないで、負擔の容易を計る爲に縣民取得の増加を以てすると言ふ具合に考案した、夫れは氏が本省在勤中民政黨内閣の不合理な財政策に惱まされた

苦い經驗から割出された勢であるか否かは知らないが、兎に角積極的人であつた。

氏が埼玉縣知事から内務省土木局長として戻られたとき土木局長は救の神が來たやうに喜んだものだつた、夫れは氏が永年土木局に居て局の事情を知悉されてゐた勢もあらうが、氏の人格を敬慕したからである、即ち氏が部下を愛護された表はれである、犯すことの出來得ない嚴格さの裏には常に人情味が燃えて居た、筆者は此溫い情味に教えらるゝ數多くのものがある、課長在職中氏に反抗的態度を持して居たことのある人が突然病死した、其の時氏は大臣官邸に於ける會議に出席することも斷つて、病院にかけ附け其の人の靈を慰め遺族の將來を吾が事のやうに心配された、筆者は異様に感じたから其の理由を聞くと、人の死は唯だ一度のものだ、とだけ聞かされ氏の心裡を知つて人に長たる者の心得を感得したこともあつた、此情味があつたから當世式な輕薄な人士を極度に嫌つた。氏の溫情に恵まれた

多くの人々が、今後氏の靈に對し氏の溫情に酬ゆるの禮を知る者幾人あるであらうかを想ふとき轉た寒心に堪へない筆者が曩年筆禍事件に罹つたとき、態々郊外茅屋に來訪され、大臣と相談して來たから今直ぐ手續書を差出せとのことであつた、官吏としての資格に於て遞信大臣の訓令を攻撃したのではない、個人として其の違法を論じたゞけであつて、官立大學の教授が法律を非難攻撃するのと同じである、夫れを論難した教授が何等責任を問はれないに不拘、僕一人が手續書を取られるのは不公平な處分である、否不公平でないかと相共に論争したのであつたが、氏は淳々と官吏の身分論を説き假令君が譴責されても恥づるところが無い、萬一世の非難を受くることがあれば夫れは君の恥でなくて僕の責任であると訓えられた、後日に至つて當時氏が畫策されたことは、涙ぐましい程の溫情から割出された計畫であつたことが判つて、今更の如く感謝したのであつた。

氏の土木局長在任は僅に八ヶ月、土木行政に對する氏の

抱負を實行せしむるには餘りに短期間であつた、併し此間失業救済土木事業豫算編成の激務に當られ、各府縣の土木事業を一層振興せしめられたことは顯著であつて今更言ふ迄もない、局員の總てに惜まれつゝ社會局長官に轉ぜられた後は氏の抱懷した社會政策の實現に盡された。

社會局の仕事は土木局の夫れとは随分違つてゐる、非資本主義的な問題が多いからである。氏の就任當初は新設された労働者災害扶助法や労働者災害扶助責任保險法の實施でなか／＼骨が折れたらしい、當時筆者に話されたことは、今の資本家は労働問題に餘りに冷淡である。然かも世上相當の理解者視せられてゐる人でも、いざ問題を決定せむとするときは言を左右に託して反對する、あのやうな考察を持つて居れば將來をどう支配する考であるか判らない。資本家が自ら墓穴を掘るやうなものだ、と嘆じられてゐた。氏は資本家の息子として生れたが、其の持つる思想は労働者否な弱者の味方であつた、失業救済事業實施の場合でも之に依つて失業労働者を救済するのは當然のことである

が、夫等事業を監督する智識階級者も相當要る筈だ、夫等の智識を具備してゐる者が職を得むとしても求むることが出来ないで遊んで居る、夫れに傳を以て頼んで来る連中はかりを採用し、頼むに縁故のない者は矢張り社會の下積と爲つてゐて不都合であるから是等を採用せよと強談されたあたりは、氏の主張を遺憾なく發揮してゐる。

從來問題と爲つてゐた兒童虐待防止法も、氏の手依つて完成され多くの憐むべき兒童が救助されてゐる、社會政策的な施設が山積されてゐるのに一部資本家の反對の爲に行き悩んでゐる案件が頗る多く、氏の手腕に俟つべきものが多々あつたが、内務次官として榮轉されたのは社會政策遂行上頗る遺憾とされた、併し次官就任以後某財閥が數百萬圓を提供するから、丹羽氏の企圖する社會事業の爲に使つて呉れと、依頼したそうであるが、是等は自覺した資本家の氏に對する信頼を物語るものであらう。

氏は各種の趣味を持つて居たが、最も得意であつたのは俳句であつた。本誌などにも好日庵の名で登載されたのは實は氏の手に爲つたものである。青年時代からの學習で斯界に於ても相當囃されてゐる、何か原稿を書いて下さいと

要求すると、六ヶ敷ことを書くのは御免だ俳句で勘辨して

呉れと言つた調子であつた。横利根閨門を視察して、自動車と稻分けて兒等走り来る。東北地方に旅して、湛水を殘して晴るる若葉かな。大曲では、庭師おる廣間に着くや閑古鳥。なぞと歌つたことは今も尙覺えてゐる人があるであらう。各地に出張して視察する折にも無言のままの態度を見たときは既に俳句が出来てゐる。俗界の些事にのみ齷齪してゐては人間味がないぢや無いかとは、よく聞かされた言葉であつた、此調子であつたから公私の行動は極めて應揚であつて、些事に拘泥しない何事も大局から判斷して誤るところが無かつた、又日本の古畫や洋畫には一見識があつた、特に神佛の古像畫に至つて造詣が深かつた公務の爲旅行した時も餘暇さへ得れば其の方面の研究に力められた、奈良の法隆寺の壁畫の如きは何回も之を觀賞して古代美術を賞えたものだつた、其の勢であらうか關西殊に奈良京都の方面に旅することを喜んだ、一見無藝のやうであつたが、ゴルフも相當の程度で一時は熱したものだつた、旅の慰としてゴルフを期待して出かけたが雨で出来ない、旅館の室内でクラブを振り廻して多大の損害賠償を請求され

たと言ふ逸話もある、京大時代は酒も強かつたさうだが病氣を得てよりは餘り呑まない、併し嫌でない爲に宴席では相當量を見たが、人の藝を見て喜ぶ方で自發的に歌はないところは陰性のやうにも見えた、併し心中は陽氣で磊落な心境を見た、是等の往時も昔話しと爲つたと想へば何となく悲しい。

氏を評するに新官僚を以てする人もある、成る程新官僚の本家本尊と言はれてゐる後藤内相の下に次官であつたからであらう、固より氏も亦例の國維會か何かの會員で官吏やら官吏たりし者を以て組織した團體のメムバーであつた、併し新官僚の團體の有無は問はないとしても、腐敗墮落した政治家の横暴を見せ附けられた憂國の士が、之を改革するに關心を持するのは當然であつて、之を憂へないものが寧ろ無自覺者と言ふべきである、此意義に於ての官僚であつた、併し立憲國に於て官僚政治を行はむとするやうな氏ではなかつた、従つて其の意味に於ての新官僚でないのである、若し後藤内相が後者の新官僚主義を行ふとしたならば、氏は必ずや敢然として職を賭して争つたに違いない、氏は筆者等に語つて言ふやう、大臣と局長との狭撃を

受けるやなうサンドイツ的次官なら無いに如くはない、と此言葉に徴しても氏の次官としての信念と、非官僚思想を窺ひ知ることが出来得やう、或は氏の態度が巧言令色的でない爲に官僚と言ふに在らば、氏の眞情を知らない巷間の浮言として評するの價値はない。

○ 丹羽氏の既往を追懐し思ふに任せて筆にした、併し夫れは筆者の小さい眼から見た、氏の一世に於けることの一片鱗に過ぎない、従つて之を以て氏の性格や在世中に於ける功績の全部を盡したもとは言ひ得ない、夫れを後世に傳へる爲には他に其の人のあることを確信する、唯だ筆者は氏が志された内務行政の改革進展の中途に於て他界されたことが頗る遺憾であること、氏が希望された萩窪の新邸に悠々自適さるゝ機なくして長逝されたことが残念である、爾後は内務省に氏の温顔を見ることが出来なくなつたが、氏の抱負は今後も繼承されて内務行政の上に表はるゝことであらう、筆者は又そうすることが氏の靈を慰むるに唯一のものであることを強調する。